

講義レジュメ

内容・テーマ	講師 <u>小川 義和</u>
<u>多様な主体との連携による学習活動の展開</u>	期 日 <u>令和元年 10 月 3 日</u>

1. 連携協働における3C (Content, Community, Context) の共有

2020年度から順次実施される学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」が強調され、子供たちが未来を切り拓く資質・能力を社会と共有し、連携して育てていくことが重視されている。社会教育施設である博物館等に対する学習資源としての期待が高まっている。

①活用できる資源, ②つなぐ仕組み・手立て, ③連携の理念と課題, の共有が大切。連携協働することが目的ではなく, 連携協働の理念と目的を共有することが重要である。

2. 事例研究

博物館にあるどのような「資源と地域資源」を「どのように」組み合わせ、連携協働しているか、「つなぐ仕組み」や共有できる「理念」「目的」は何かなどの視点を持って事例を考察する。平田功氏(大船渡市立博物館)からは、震災と津波により激減した学校教育利用状況から、新たな連携・協働事業と「教員のための博物館の日」事業を中心にご紹介いただく。伊藤直仁氏(川越市立博物館)からは、博物館が教育委員会と密接に連携し、小中学校や特別支援学校を対象に出前授業等を中心にご紹介いただく。

3. 博学連携は生涯学習のはじまり

・「社会に開かれた教育課程」→「社会とともにある教育課程」

学校による博物館活用をその後の子供たちの個人利用に結びつけることが大切。すなわち博学連携は子供たちの自由選択学習と生涯学習のきっかけである。

4. 博学連携から博物館機能の拡張へ

これからの博物館は、「施設としての博物館機能に加え、博物館と博物館を取り巻く環境からなる文化空間において、多様な主体と連携協働する機能を併せ持つ機関である。」と考え、地域にある社会的リソースと学校をつなぐことで、博物館の機能が拡張していく。

各博物館が持つ特徴的な資源と地域の多様な主体をつなぎ、地域全体として博物館力を高めていくことが、変化の激しい社会における生き残り、発展につながる。自己完結型から他の機関との連携協働による博物館活動の展開は、内なる博物館と開かれた発信する博物館の機能強化になり、また地域の資源を再発見し、将来に受け継ぐことにつながる。そして、日本の博物館が独自の連携協働の工夫事例を国内外に発信していく。

〔参考文献〕

日本博物館協会「対話と連携の博物館-理解への対話・行動への連携-【市民とともに創る新時代博物館】」, 2000

小川義和編著「協働する博物館 博学連携の充実に向けて」ジダイ社, 2019